



## 今月の主な目次

- 雪印の優良牧草品種を活用して草地更新を  
しましょう
- 更新事例：表層攪拌による更新  
(ロータリーハロー、アッパーロータリーによる更新)

- 営業所からのお便り(5)
- 別海営業所からの紹介：TMR利用組合 マイスターフードSFR
- 一般社団法人全日本畜産振興事業中央会(全日畜)について

## 時の話題

### 今後の輸入飼料の動向

本題に入る前に宮崎県で発生した口蹄疫につき発生した生産農家および周辺農家・関係者に対し、対策に尽力されていることに心から敬意を表するとともに、一日でも早い清浄化・他地域への拡大防止を望んでいます。

4月20日に発生以来6月4日にえびの市が解除されたものの10市町に拡大し6月14日現在牛・豚等疑似患畜が197,718頭に達しています。

この間、拡大の防止のため政府の口蹄疫対策本部は5月19日に新たな防疫対策を決定し、現在その決定に基づき作業が進められていますが拡大に歯止めがかかっていません。

北海道においてもまん延防止のため、5月20日に家畜等の移入の禁止を決めています。

(熊本・大分・宮崎・鹿児島県からの牛・めん羊・山羊・豚・水牛・しか・いのししにつき当分の間)

また、10月に北海道で開催予定していた第13回全日本ホルスタイン共進会についても5月28日にまん延防止のため「2010年度中の開催は自粛する」との発表がありまことに残念でなりません。

この影響は発生地域にとどまらず、九州における子牛取引の延期・中止により子牛取引が激減し、子牛価格の上昇をもたらしており、枝肉価格が低迷している肥育農家にも今後大きな影響をもたらす懸念があります。政府のしっかりとした支援をお願いしたい。

一方、鶏インフルエンザに振り回された昨年以來、防疫体制の強化を進めてきたところですが、改めて世界の中の日本を意識し防疫体制の再整備をわれわれ自身が取り組むとともに、政府においても危機管理体制の再構築を要望するところです。

弊社としても微力ながら、被害にあわれた地域に対し、消石灰の提供等消毒体制の協力をすすめているところです。

さて、本題にもどりますが、とうもろこしの動向は6月のUSDA需給発表でエタノール需要の増加により旧穀・新穀ともに期末在庫が前月比下方修正されましたが、新穀生産量については理想的な天候から順調に作付けも進んでいることから豊作期待感も高まり安定在庫は確保できる見通しです。

大豆の動向についても旧穀クロープの在庫率も世界的には前年を大きく上回る状況にあるとともに新穀クロープについても同様な見通しであり需給逼迫感は薄らいでおります。

このような状況から他の大きな要因がなければシカゴ相場は軟調に推移すると思われます。ただし、中国の買付動向には注意が必要です。

一方、海上フレートは中国の旺盛な鉄鉱石・石炭輸

入により上昇を続けており、当面高止まりの状況で推移すると思われます。

また為替についてもギリシャ発のユーロ圏における金融不安から一時ドルに対して相対的に円高に向かったものの、その後円安にもどり今後ともやや円安の傾向がづくとも見えています。

以上の観点から、配合飼料価格についても大幅な値上げは考えにくいものの現行の高値水準が当面づく可能性が高いと判断しています。

一方、輸入粗飼料に目を向けると、オーストラリアの09年産のオーツヘイは概ね天候に恵まれ生産量は70万トンに達し潤沢な状況にあり、価格的にも割安な状況で輸入量も増加しています。また10年産についても播種が概ね順調に推移し、作付面積もほぼ昨年並みと見られています。

アメリカ産のアルファルファ乾草についてはワシントン州の新物(10年産)の作付け面積は前年比5%減となっており、米国内・UAE・中国等の需要増により産地相場も堅調であり、新物相場も下がる様子はありません。すでに1番刈りが開始されましたが、天候不良によりほとんどが雨に当たった模様です。今後も天候不順が予想され収穫遅れが懸念されますが供給余力は十分です。

また、チモシー乾草の新物の作付面積はワシントン州で8万エーカーと前年より増加していますが、日本からの引き合いが強く産地相場は堅調です。すでに昨年ものについては底をついている状況であり、現地の天候不順による遅れから新物入庫が間に合わない状況にあります。

以上のように新物に一部遅れはあるものの供給には大きな支障はないものと判断していますが今後の天候および中国の買付動向に気をくばる時期が続くそうです。

価格的には上記のように産地価格が堅調であるとともに、コンテナ・フレートが不況による定期航路の縮小・省エネのためのコンテナ船のダウン・サイジング化等のためコンテナ・スペースがタイトとなり、昨年9月以降毎月のように値上げされこの要因もあり国内価格は上昇しつつあります。

一方、北海道は6月に入り好天候が続いていますが、6～8月の3ヶ月の長期予報によると例年に比べ気温が低くなる時期があるとともに、曇りや雨の日が多くなるとの見込みであり、昨年同様牧草・飼料作物の生育不良が懸念され、収穫時の天候次第では品質の低下も予想されます。

今後の天候次第では収量のみならず、収穫後の栄養面・品質面にも気をくばり(早めの分析)、輸入粗飼料・粗飼料入り混合飼料等をうまく活用した対策を講ずる必要がありそうです。

今年度も早めの粗飼料確保と品質の確認を実施し、飼料給与のご相談についてはお気軽に弊社担当営業マンにお申し付け頂きますようお願い申し上げます。

(常務取締役 東京統括支店長 佐藤 洋)